卒業

関西大学　社会安全研究センター　小澤　守

3月は卒業のシーズン．あちこちの学校，大学で卒業生がニコニコと，また，数年に亘って一緒に学んだ仲間が場合によっては離れ離れになる時期で，それぞれの胸には一抹の寂しさが去来することだろう．裏腹に，4月からの新しい生活にどことなく胸をときめかせる時期でもある．筆者にとって記憶に残る卒業式は，残念ながら小学校くらいである．1クラス24人しかいなかった山間の小学校から少なくとも数倍が在籍する中学校に行って，さてどんな生活がどんな勉強が待っているのか，ほとんど情報がなかった．8歳と5歳年上の兄姉はすでに高校に通っていたし，教科書を見ても特に英語などアルファベットを知っていただけで，皆目わからないことだらけだったということもある．また卒業式が近づくと，音楽の時間は「仰げば尊し」の練習が頻繁に行われ，なんとなく雰囲気を盛り上げていたなかで，担任の先生から突然，文字が書かれた和紙が丁寧に幾重にも折られたものを渡された．「これ，よく読んでおけ」．ただそれだけであったが，家に帰って中身を見たら頭に「答辞」と書かれていた．5年生の時に「送辞」を読んだわけでなく，5年生以下の生徒集団の中で適当に「蛍の光」をうたっていただけで，「答辞」なるものを読むなど想像もしていなかった．中学から高校に上がるときも高校から大学に行くときもさして感動も特別な役割もなかったことから，結局，記憶に残るのは人生最初の（幼稚園がわが村にはなかった）卒業式になるというわけである．

さて，この『六甲展望』は筆者が執筆を始めてから7年くらい経つと思うが，当初から筆者の駄文の編集作業を担ってくれていた女性がこの春，印刷出版会社を退職されることになった．彼女とは同社が芦屋市に居を構えていたことからの付き合いで，設立間もない学会の事務処理や学会誌の編集作業をかれこれ30年以上に亘ってこなしていただいてきた．会誌発行に係る編集委員会や会誌の校正，発行に際してどれだけお世話になったことか．仕事といえばそれまでだが，折々に彼女が見せてくれた気配りに大いに助けられたものである．学会誌は現在では著者がデジタルデータを提供するようになっているが，当初はタイプ印刷だった．会誌の本体はあってもデジタルのデータはなかったわけで，筆者の師匠の連載記事を本にまとめる際には会誌をスキャナーで読み取り，OCRで文字に変換しなければならなかった．そんな面倒な作業の後，読み比べて読み取りミスを丁寧に修正してくれるなど，全体の編集作業が非常にやりやすかった記憶がある．

一般にはこのような転機を「退職」というのではあるが，最近の寿命の長さに比べてもまだまだ活動ができる年齢であるはずで，文書などの編集・印刷の業務を離れた後，前を見てまた新たな活動の場を開く際には，それまでの仕事をやめるというより，「卒業」のほうがよく似合うように思う．筆者の個人的な感想ではあるが．その意味でいえば，筆者も4年前に大学を卒業したはずなのだが，相も変わらず以前からの作業を継続している．仕事と言わず作業というのは，それを成し遂げたとしてもほとんど生産性は上がらない，経済的な寄与はゼロだからである．例えば最近，大学の研究室を撤退した際に持ち帰ったもののなかに，

その昔，各種の資料から作成された舶用ボイラの開発年表を見つけた．青焼きで一部消えかかっているその資料を見て，何とかデジタルのデータとして残しておきたいと思い，癖のある手書き文字の掘り起こしをやっている．日本にどのようにして海外の技術が導入され，どのような努力を重ねて現在の状況に立ち至ったのか，技術導入の課程で何が問題で，何がよかったのか，自分なりに納得したいと考えているからかもしれない．なにも儲からないし誰もほとんど興味を示さないとは思うが，そんなことはどうでもよくて自らの思いだけでやっている．そのようなことが可能な退職後の環境に感謝しつつ，きっとなにか新たな発見があるはずと期待もしている．

　そんなことから，この度これまでの仕事から卒業する彼女にも，何でもいい，新たな発見が伴う活動があるはずで，それを精一杯楽しんでほしい．そのとき彼女は以前よりもいっそうきらきらと輝くはず．もっともすでに計画があって，筆者がとやかく言う必要など全くないかもしれないのだが．